

研究課題：当院における新規薬剤時代の多発性骨髄腫に対する初回自家末梢血幹細胞移植 101 例の後方視的解析

研究の概要：2006 年以來、新規薬剤と呼ばれるボルテゾミブ（ベルケイド）、サリドマイド（サレド）、レナリドミド（レブラミド）の登場により多発性骨髄腫の治療成績は向上しています。さらに、2015 年にはポマリドミド（ポマリスト）、パノビノスタット（ファリーダック）が、2016 年にはカルフィルゾミブ（カイプロリス）、エロツズマブ（エムプリシティ）が、そして 2017 年にはイキサゾミブ（ニンラーロ）が登場しました。一方で適応となる患者さんは限られますが自家末梢血幹細胞移植併用大量化学療法（自家移植）も高い奏効が期待出来ます。これまでの研究によって自家移植は診断後の早い時期に行うことでより高い奏効が得られ、再発までの期間も延長されることが示されてきましたが、上記のような新しい薬剤の登場により治療選択肢が広がったことで、自家移植をいつどのような患者さんに行うべきか、再検討することが必要と考えられています。

今回私たちは、当院における多発性骨髄腫に対する自家移植の近年の傾向および治療成績を把握して今後の治療指針に役立てるべく、後方視的研究を行うことを計画しました。

対象：2010 年 1 月～2017 年 2 月に行われた多発性骨髄腫に対する自家移植 101 例を対象としています。

研究の方法：診療録をもとに、患者さんの背景、治療成績、副作用等を解析します。

倫理的配慮：個人情報保護には十分な配慮を行った上で解析を行います。上記対象に該当すると思われる患者さんで、本研究への登録を希望されない方は下記までご連絡下さい。

日本赤十字社医療センター 血液内科  
研究責任医師：塚田 信弘  
TEL 03-3400-1311（代表）